

ハブの季節

みなさんは、「へび」

と遭遇したことがありませんか？五、六月と十一月は、沖縄県では「ハブ咬症注意月間」とされ、その被害の多い季節です。

猛毒の「ハブ」は、体長が大きいもので二メートルほどにもなる、頭のところが、夜行性のへびです。黄色か白色に黒の網目模様が特徴です。ハブは昔も今も怖がられてはいますが、昔は焼いたり、おつゆにしたりして食べていたようです。

同じく有毒のへびに、ヒメハブがいます。その方言名は、桃原では「ニーブヤー」（ねぼすけの意）、我謝や翁長などでは「チンハブ」と呼ばれているようです。体長が、大きいものでも八〇センチ程度と、短くて太いのが特徴です。攻撃性は低いということですが、有毒なのでこれも要注意。

また、ガラスヒバアという有毒のへびがいます。黒っぽい、細い体の特徴です。カエルなどを食べるためによく水辺にいるようです。棚原では「ガラシーバー」と呼ばれているようです。

無毒のへびには、アカマタがあります。赤と黒のしま模様が特徴です。方言では「アカマター」と呼ばれています。アカマタは、気性があらく、よく咬みつき、時にはほかのへびを食べたりするようです。

また、土の中には、世界一小さなへび、メクラへびがいます。無毒で、見た目はミミズによく似ていて、大きいものでも約一八センチほどです。しかし、よく見るとウロコがあり、ミミズよりも硬い体をしていいます。方言では「ミッククワーハブ」というそうです。

ハブをはじめ、アカマタやガラスヒバア、ハイなどは、琉球列島固有のへびです。ヤンバルクイナなどと同じ、沖縄が誇るべき動物です。へびが好きだという人はあまりいないとは思いますが、そう考えるとちょっと興味がわいてくるような気がしますね。

町内でも、しげみや屋敷周辺からハブが発見されています。最近では特に内間御殿で多く見つかっているようです。県の調べによると、ハブに咬まれる場所は、畑がもつとも多く、庭や部

屋の中で咬まれることも多いということですが、夜行性ですが、農作業中に発見されたりすると、人間から身を守るために咬みつきます。もしへびに咬まれたら、まずハブかどうか確認します。それがハブであれば、助けを呼び、応急処置をします。傷口から、口で、繰り返し血と一緒に毒を吸い出します。そして、なるべく安静にし、すぐに病院へ連れていってもらいましょう。近くに人がいなくても、走らず、歩いて、人がいるところまで行きます。

万が一のときのためにも、正しい対処法を身につけ、ハブやその他の毒へびの被害から身を守るようにしたいですね。

